

令和7年度第1回埼玉県孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム運営協議会

1 日 時：令和7年7月24日（木）

2 開催方法：オンライン

3 出席者：

（1）出席会員 16名

中島修会長、東宏行会員、小池要子会員、高橋多佳子会員、村田恵子会員、青砥祥子会員、坂本純子会員、春野すみれ会員、土屋麻由美会員、鈴木学会員、谷口周子会員、熊井英朗会員、金澤典子会員、上田優会員、福島朋和会員、小林和政会員

（2）代理出席会員 1名

永井紀子会員

（3）欠席会員 3名

岩上洋一会員、遠藤まめた会員、唐澤恵子会員

4 会長の互選、副会長の指名：

坂本会員から中島会員の推挙があり、出席会員の異議なく、中島会員が会長に就任した。
中島会長が村田会員を副会長に指名した。

5 議事（概要）：

<事務局>

報告事項について資料説明

<中島会長>

ありがとうございました。プラットフォームの会員は、現在166団体ということでした。
この件について何かご質問などございますでしょうか。基本的なところですのでよろしいですかね。
では次に、議題1及び議題2について事務局からまとめてご説明をお願いいたします。

<事務局>

議題1、議題2について資料説明

<中島会長>

ありがとうございました。重点計画の見直しがあったということで、特に小中高生の自殺数が過去最多ということで大きく取り上げられています。私もこども家庭庁と厚労省で自殺防止の関係の会員をやっておりまして、非常に大きなテーマになっております。日本の自殺防止はずっとボランティアによって支えられてきたんですよね。いのちの電話ですとか、チャイルドラインですとか。そういう中で今、みんなで支えていかなきゃいけないということで、ようやく少し公的なお金が流れるようになってきたというところが実態なんですけれども。ライフリンクさんをはじめ、色々な

NPOの皆さんが頑張っていたいてるかなという印象でございます。

改めて意見を皆様からいただけたらと思います。意見交換会ですとか、メタバース空間でのつながるSAITAMAフェスタ、つながるSAITAMA大賞、つながりサポーター養成講座などの話がございました。つながるSAITAMA大賞で審査員長をお願いしておりました東先生に最初に口火を切っていただいて、何かご意見などいただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

<東会員>

広範な内容なので、私はやっぱり子供の自殺防止の部分が一番気になる場所ですね。資料2で、小中高生の自殺者数が過去最多で、家庭でも学校でもない多様な居場所づくりということが書いてあります。もちろんメタバースの方も重要だと思うんですが、2点だけ思ったことだけ話しておく、1つは10年ぐらい前から文科省などは居場所づくりだけでなく自殺予防教育まで含めて、もうちょっと踏み込んで考えていこうとしています。今までは困ったことがあったら受けとめるよとか、相談できるよという方向だったんだけど、それ以前に予防的な教育をやっていこうという方向に進み始めているので、そういうところで何かできないのかなとは思いました。

多分、学校教育の現場では、多少そういうことを意識してやってるところもあれば、やってないところもあると思うんですけども、教材などは結構いろいろ工夫して作られ始めているので、自殺予防教育という視点で、何か啓発活動みたいなことできないだろうかというのが1つですね。

それからもう1つが、バーチャル埼玉の中に青少年課の方でバーチャルユースセンターというのをつくったと思うんですけど、そういう他の課で行われてることとの連携といいますか、もうちょっと総合的に考えていかなきゃいけないなと思っていて、居場所づくりは色々な部署でやっていくのが一番いいと思ってます。別にそれを統一する必要もないし、色々な場所でやっていく。ただ、できれば横の情報共有というのはできるいいなと思いましたね。

ちょっと2点、そんなところが気になっているところです。

青少年のところではそんな感じで、単身世帯のところは、前回議論になったように、高齢だけでなく、若い人の単身というのも含めながら考えていくという方向性で賛成です。

<中島会長>

ありがとうございました。とても大事なご指摘をいただいたというふうに思います。

この間、20代、30代というところのサポートの大事さですとか、20代から40代のところを大事にやっていくという議論もしてきましたし、1年目の時はこどもの居場所、こども食堂を中心とした議論をまずやらせていただいたと思うんですけども、今、東先生が話していただいたような小中高生の自殺の防止、予防というところになりますと、もう少し踏み込んだ意見交換が必要なのかなというふうに思います。

本当に文科省の調査ですとかが深刻な状況で、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを小中学校にすべて配置していこうとしているなど、文科省も大変なところですし、こども家庭庁も広報を一生懸命やっていこうとしているようでございます。

皆様からもぜひご発言いただきたいと思います。こどもの部分で言うと、やはり坂本会員でしょうか。ご意見いただいてもよろしいでしょうか。

<坂本会員>

先般「つながるSAITAMA大賞」をいただきました件で、ご報告がございます。実は先週、副知事が私どもの

児童センターにお越しになりまして、そこで行っております「なかまほいく」の取り組みを熱心に視察してくださいました。予定の時間を超えて、参加しているお母さん方の声を一つひとつ丁寧に聞いてくださったと伺っております。

この「なかまほいく」は、新座市に2つある児童センターのうち1館で長年続けているものでして、子育てを始めて数年の、特に孤立しがちな親子のためのプログラムです。この取り組みの最大の成果は、親子同士の横のつながりを育むことで、産後うつや育児ノイローゼ、ひいては虐待の防止にまで、大変大きな効果を上げている点です。参加者からは「孤独から解放された」という切実な声も届いております。現場の職員も、この素晴らしい取り組みをぜひ全県の児童館に広げてほしい、という思いで副知事にご説明させていただきました。

申すまでもなく、子育て中のご家庭はどうしても地域から孤立しがちです。そうした中で、早い段階から「地域の中で子育てをする」という経験をさせていただくことが、親子双方にとって、何かに行き詰まった時に「あの人に相談しよう」と、地域の顔が思い浮かぶ環境づくりにつながります。これは、問題が深刻化する前段階での、極めて重要な「予防対策」であると、私は確信しております。

さて、話は少し変わりますが、現在夏休みに入り、児童センターには多くの小中学生が、この猛暑を避けるために朝から晩まで過ごしてくれています。お弁当持参で一日中いる子どもも少なくありません。

そうした子どもたちと日々接しておりますと、やはり、様々な悩みを抱えていることがわかります。特に、夕方に設けている「中高生タイム」では、小学生が帰った静かな環境で、職員にそっと悩みを打ち明けてくれる生徒もおります。

もちろん、こうして児童センターに来て、私たちに話をしてくれる子たちはまだ良い方です。誰にも相談できず、街をさまよう子たちも大勢いる中で、自らここを選んで来てくれる子たちを、我々は全力で守りたい。そう強く感じております。

そこで、ご提案です。思春期の子どもたちの悩みは、いきなり「自殺」という深刻な形で現れるわけではございません。職員への日々の他愛ない相談の中に、そのサインが隠されています。しかしながら、そのサインを受け止める側の職員のスキルアップが、これまで十分だったとは言えません。

この機会にぜひ、児童館の職員や若者支援に携わる方々を対象に、一歩踏み込んだ、具体的な「自殺予防」の視点を取り入れた質の高い研修を実施していただくことはできないでしょうか。皆様のお話を伺い、今まさにそれが必要だと痛感いたしました。

< 中島会長 >

実は今年、厚労省で、自殺のSNS相談をずっとNPOの皆さんがやってきていて、そのガイドラインは平成30年に作ったものなんですけど、見直すことになって私も関わらせていただくんですけども、そこに出てくるのは坂本会員さんがおっしゃったように、SNSの相談からいかに対面の支援とか、地域の支援に繋いでいくかで、ここが1つ課題なんですね。若い人たちには電話は敷居が高くなっていて、匿名の中で相談をしていく形になる中で、ここがなかなか悩ましいんですけど。この辺をぜひ皆さんに教えていただきたいところなんですけど、自治体の動きとして、さいたま市の金澤会員がもしわかりになったら。小中高校生の自殺は非常に難しいと思うんですけど、何か対応についてございましたら情報いただけますか。

< 金澤会員 >

さいたま市の状況としましては、自殺対策は保健衛生局の保健衛生総務課という部署を中心に取り組んでおりまして、教育委員会等とも連携しながら対応をしているところではあります。若者の居場所ということで、不登

校のお子さんを対象とした若者自立支援ルームですとか、あとは教育委員会の方でやっておりますオンラインを活用した相談体制等もあります。私は今、孤独・孤立対策の担当をさせていただいておりますが、なかなかそういった情報入ってこない部分もあります。今年度から立ち上がった組織ですので、庁内の取組ですとか、各民間団体等の取組を、実際出向いたりしながら情報集約を進めているところで、まさに横につなげる取組を進めていきたいなと考えているところです。

< 中島会長 >

東先生、やっぱりここが福祉と教育など色々な分野のはざまというか、なかなか難しいところなんですよ。だからこそ、このプラットフォームが大事だと思うんですけど。小中高生はどうしても学校、教育分野がかなり大きな比重を占めるんですけど、それだけでは厳しいですよ。

< 東会員 >

それはそうだと思いますね。だから、去年あたりから埼玉県で言ったら「さわやか相談室」というのが中学校の中にあったんですけど、さらにそこに文科省から予算がおりて「スペシャルサポートルーム」というのが置かれるようになって、居場所の多様化というか、色々な場所をつくり始めてるというのは確かだと思うんです。高校だと、ところによって随分違うんですけども、こども食堂みたいなものと組み合わせたりして、校内カフェといって、高校の中で居場所づくりをやり始めてるんですよ。

私はいくつかの層で居場所をつくっていったり、そこで気軽に相談できるっていうようなことが必要だと思っていて、学校の中にも多様に場所をつくっていったるんですけど、やっぱり学校の中では相談しづらいとか話しづらいという子が当然いるので、外でも色々なチャンネルで居場所をつくっていくというのは効果的だろうなというふうには思いますね。ただ、やっぱり相談を受けますだけだと、どうしても敷居が高くなってしまうので、何かこういう活動やってますよとか、こういうボランティア会がありますよとか、そういった中で自分の思っていることを話せるチャンネルをつくっていくという、そんな広がりが必要かなと思ってますね。

相談の方も、コロナの2年ぐらい前に長野県かどこかでLINE相談を始めて、やっぱりLINEだとどこから発信してるのかもわからないし、誰かもわからないので、それをどうやって電話とか対面につなげていくのかというのがずっとやっぱり課題だったと思うんですけどね。そこはもう私も具体的にどうしたらいいのかはわからないんですけど、実際にもう試行してるところがあるので、そういうところでどんな課題があるかというのを収集していくのがまずは必要なことかなあというふうには思っています。今、言えるのはそんなところですかね。

< 中島会長 >

ありがとうございました。校内カフェのお話やLINEによる相談のお話をいただいたり、大事なご指摘をいただいたと思います。校内カフェは神奈川県立の田奈高校というところが有名で、そこからどんどん広がってきてると思うんですけども、いわゆる支援を学校の中に入り込んでやろうということですから、すばらしい実践だと思います。LINE相談は今、本当にライフリンクというNPOをはじめ、あなたの居場所ですとかボンドプロジェクトですとか、色々な団体がやり始めています。段々と主体が広がってくると、個人情報はどうするかとか、記録をどうしていくとか、色々な課題は出てくるんですけども、今まさにLINEなど使った相談が広がってるかなと思います。

自治体の方から、もうちょっと聞いてみましょうか。東松山市の福島会員いかがでしょう。自治体ではなかなか難しいですよ、こういうものって。どんなふうに受けとめていらっしゃるでしょうか。自殺防止の計画とかいかがでしょう。

< 福島会員 >

東松山市もさいたま市さんと同様で、健康推進課という保健とか衛生の部門が自殺の計画を所管しております。私は福祉の部門に所属していますが、正直なところ、教育委員会の部門、学校とかと話をする機会というのはあるんですけども、まだ連携が進んでいないかなというふうな印象があります。この孤独・孤立対策につきましても、関連しそうな内容は学校であったりとか、学校を所管してる部署と共有はしてるんですけども、結構「これなんですか。初めて聞いたんですけど」という声を聞くことが多くて、そちらの方面での周知というのも、今後は必要になってくるのかなというふうにお話を伺ってて考えていたところです。以上でございます。

< 中島会員 >

ありがとうございます。やはり、自治体でこれをどう取り上げていくか、健康保健の部署或いは教育委員会とどう連携するかというのは、福祉部門の部署として大事な課題でしょうね。

埼玉県社協の熊井さん、今回からご参加いただいておりますが、なかなか自殺防止は1つの課だけでは厳しい、色々なところに跨らないと厳しいということがわかってきたと思うんですけど、埼玉県全体を見ていかがでしょうか。何か情報がありましたら教えていただきたいんですけど。

< 熊井会員 >

自殺防止について、特に若年層となると社協としてどうかはなかなか思いつかない部分もあるんですけど、社協は元々地域福祉を推進する団体で、住民主体や地域全体で色々な物事に関わったり、課題解決に取り組んでいます。どこかの社協で子供の自殺防止について、何かを実践しているかは、ここでは具体的な情報はないですが、各地域の色々なつながりの中で、予防や防止ができればと思います。

あとは先ほど来、話題に出ている教育と福祉との連携という点では、社会福祉協議会は以前から学校と福祉教育をやっているので、そうしたつながりの中で、例えば孤立・孤独対策とかをテーマにして、教育現場、学校と一緒にできることは何かあるのではないかと考えています。直接的な答えになっていませんが以上です。

< 中島会長 >

ありがとうございました。何でお願いしたかと言いますと、直接的な自殺防止はなかなか難しいんですよ。ですから、こども食堂ですとか、そういう居場所で、居場所だけじゃ難しいんですけど、或いは福祉教育やボランティア学習のところで子供たちに考えてもらう機会の中でとか、間接的に少しずつ近寄っていくことが大事かなと思って、少しお話を聞きたかったところです。

福祉教育の話題を出していただきまして、ありがとうございます。またぜひ意見いただけたらと思います。

埼玉ユースサポートネットの青砥会員、色々な若者たち見てきてと思うんですけど、この議論いかがでしょうか。小中高生の自殺が多いとか孤立の問題ですね。

< 青砥会員 >

先ほど、さいたま市の金澤会員からもお話もいただいたんですけども、私どもはさいたま市と連携をして若者自立支援ルームの運営をさせていただいております。そこに来ている若者たちは年間に延べ数千ということになるんですけども、その若者たちも背景は様々です。壮絶ないじめを受けたことがあるとか、虐待を受けたことがあると

か、色々な困難を抱えてここまで何とか生きてきた若者たちがいます。自殺ということが頭をよぎりながらも生きて何とかここまでやってきたという若者たちが、地域の居場所につながったことで次の生きる希望を見いだすような、そういった実践をさいたま市セーフコミュニティ自殺予防委員会で若者たちが自ら登壇してお話をさせていただいたこともありました。

私たちは普段、さいたま市の見沼区に本部の拠点を築いているんですけども、そこに構えている拠点を地域のプラットフォームという形で運営していけないかということで、ここでも以前にお話させていただいたかと思うんですけども、若者の貧困ですとか、様々な困難が孤立が背景にあるということを考えて、地域の小中高の学校から先生方、不登校の問題では教育相談室の先生、医療機関からは児童精神科医、外国ルーツや障害、不登校の問題に取り組んでいる地域の団体さんが参加する、まさにこの孤立・孤独のプラットフォームが目指している規模をもう少し小さな地域で実践している堀崎プロジェクトと称する、子供たちを支える地域のプラットフォームづくりに取り組んでいるところです。

私たち NPO だけの活動には限界があります。若者自立支援ルームには専門職の心理士もおりますが、やはり学校、スクールソーシャルワーカーさん、教育相談室の先生方等、様々な方々と連携することで子供たちを支えるプラットフォームをつくっていけるんじゃないかなというふうに思っているところです。

以前に児童精神科医の先生の研修を受けさせていただいたときに、突発的な自殺というよりは、オーバードーズやリストカット等の子供たちの苦しさというのは普段の子供たちの様子から、実は観察ができるんじゃないかということを先生がおっしゃっていて、やはり日常でそういった困難を抱えた子供たち、若者たちとのつながりを持ち続ける、日常的に見守るような場所を地域でつくっていくということの重要さというのは日々認識しながら活動しているところです。

< 中島会長 >

ありがとうございました。若者たちの実態が非常に見えてきました。ありがとうございました。

今、オーバードーズの話がありましたが、これは本当に自殺の防止の中でよく出てきて、風邪薬を大量に服薬して自分を奮い立たせようとするんですよね。それが行き過ぎて昏睡状態になったり、救急車で運ばれたりという状況になると、不安感を抱えてる若者たちの現れだと思うんですけど。

例えば、そういう状態を病院の方で受けとめていくという意味で、小池会員、済生会でそういったことを見るということもありますでしょうし、またゲートキーパーの話も少し伺いたいと思うんですが、いかがでしょうか。

< 小池会員 >

今、病院の方でというようなお話もあったんですけども、先ほど坂本さんが児童センターで接する職員が自殺予防というようなスキルを身につけてもいいのかなというようなお話をされたりとか、ユースサポートの青砥さんも日常で見守る社会資源ということで、色々な居場所があって、色々な見守ってくださる方たちが着実に増えてると思うんです。そういうところが気づいてあげて、つないであげるというのが大きな意味で自殺予防に繋がっていくと思うと、学校でも自殺予防教育みたいのが進んでということなんですが、見守る人にも自殺予防教育でスキルみたいなものを、例えばつながりサポーターの研修のところにプラスしてやってみるというような手法で、そういったものを広げていく、目を鍛えていくというのもあるのかななんて、皆さんのご意見聞いて考えていたところです。会長からのご要望と違う回答かもしれませんが、以上です。

< 中島会員 >

ありがとうございました。逆に色々な話をつないでいただいてありがとうございました。

このプラットフォームで、つながりサポーターの養成がありますので、一般的な自殺対策ではゲートキーパー講習というんですけど、そういったものをつながりサポーターの研修中で一部取り入れていくという、とてもいいご提案をいただいたかなと思います。

ダイレクトな自殺対策はなかなか難しくて、ちょっと皆さん遠慮したりとか、敷居が高かったりするんですけど、秩父市の上田さん、先ほどのゲートキーパー講習、或いはつながりサポーター養成の中で自殺を何とか防いでいけないだろうかということを、やったりしているみたいな動きはありますでしょうか。

< 上田会員 >

秩父地域は 1 市 4 町で定住自立圏構想を使って自殺予防対策をやってまして、保健センターが事務局になってるんですけども、そちらの方でゲートキーパーの養成講座をやったりとか、年に 1 回講演会をやったりしてます。

ただ、なかなか自殺予防対策は実績が見えにくいというところがあるので、やってる人にも「これでいいのか」という部分があるのかなというのは個人的には感じます。

< 中島会長 >

でも、そういった取組を 1 市 4 町でしっかり取り組んでいただいているのは素晴らしいなと感じましたので、広域でのそういった取組が参考になってくるんじゃないかなと思います。

坂本会員さんが手を挙げてくださっているようです。お願いします。

< 坂本会員 >

先ほど、つながりサポーターの研修をさいたま市とやられるということでしたけど、これはどんな形になるんでしょうか。例えば、NPO が何団体かで共同で養成講座をお願いしたいなんてことを県にお願いできるということなんでしょうか。ちょっと詳しく、お願いの仕方ですとか、実際の講習の時間とか内容がどんなものなのか教えていただければと思うんですけど。県が呼びかけて参加者広く募ってという形で去年はやられたと思うんですけど、個別オーダーで今年からは対応していただけるということなのかなと思ったので、もう少しそこが拡大できるものなのかどうかというものも含めて伺えればと思ったんですけど。

< 中島会長 >

事務局とさいたま市さん、お願いします。

< 事務局 >

ご質問ありがとうございます。昨年度は東松山市さんと一緒に国の事業に手を挙げて、つながりサポーター養成講座を実施させていただきまして、東松山市さんの方では、今回さいたま市で予定していると同様に、民生委員さんを中心に参加者をお集めいただいて対面で、県の方ではプラットフォームの皆様にもお声掛けをして、自由にご参加いただけるような場をという形でオンラインでやらせていただきました。

今年度はどこかと連携して、去年東松山市さんと連携したように、さいたま市さんとの連携ですとか、企業さんとの連携ですとか、NPO ですとか大学さんですとかと連携して、年 3 回くらいやりたいと思っておりますが、そのや

り方というのは、連携いただけるところとカスタマイズしていきたいなというふうに思っております。時間の方も、また内容の方も、先ほど小池会員の方から自殺予防についても少し盛り込んでみたらというようなお話もありましたので、一緒にやっていただける NPO ですか、大学ですか、企業さんですかのご要望にあわせてやり方というのは考えたいと思っております。

ですので、先ほど坂本会員の方からご質問のありました、いくつかの NPO で一緒に手を挙げてということであれば、それに合わせてやらせていただきますし、対象はどういった方にするのかということも NPO の会員だけということもありえますし、できたら県としては広くさせていただきたいので、公開にさせていただいてということもあるかと思えます。内容についても、ショートバージョンでやって欲しいとか、ロングバージョンでやって欲しいとか、講師の先生は国の講師として養成された方ではなくて、自分たちでやりたいからちょっと勉強したいということであればそういうこともできますし、いろいろとカスタマイズはできるかと思っております。

今、企業さんですか、大学さんとかとできたらなと思っているのは、企業さんに関しては、企業の社員さん向けで、広くオープンにできるようであれば一緒に県民の方にも参加いただけるような場をつくれたらなと思っておりますし、大学さんに関しては学生さん向けをメインとしながら公開講座ができればいいな、というような構想を持っております。ただ、まだ調整は進んでおりませんので、もし NPO さんから一緒にやりたい、やっていただけるというお声をいただければ、一緒に考えていけたらなと思っております。

< 中島会長 >

ありがとうございました。孤独・孤立は本当に今、全体に広がってますので、そういった意味で色々なところ、大学で取り組むのもとてもいいと思います。突然出てこなくなる学生も非常におりますし、或いは働いてる方の中にも孤立感を感じていらっしゃる方、特にコロナ以降は 30 代の主観的孤独感が非常に高まっているという、そういう話が確か意見交換会で東京都の長寿社会センターの方に来ていただいた時に出たんじゃないかなと思います。

今年はさいたま市さんで民生委員の方向けに取り組むようですけども、つながりサポーターについて金澤会員いかがでしょうか。

< 金澤会員 >

今年度、埼玉県から声かけをいただきまして、共同で開催ということで、地域の民生委員さんを対象に、私どもの方で会場を準備して、民生委員さんに関しましては集合形式で実施を考えております。埼玉県さんの方でハイブリッド開催のオンラインを設定していただけるということですので、またプラットフォームの皆様にもお声掛けいただけるのかなというふうに考えております。

つながりサポーターを広げていくのが大事だなと思っております、孤独・孤立対策は既存の様々な事業、年代問わず、どこの分野でもそういった視点で関わっていくということが重要と言われておりまして、さいたま市でもどのように展開できるか考えているところです。まず今年度はさいたま市の職員を対象に、5 月に孤独・孤立対策強化月間がございましたので実施したところです。

今回、埼玉県さんと一緒にやらせていただくことを踏まえまして、また次年度もつながりサポーター養成講座を続けていきたいと考えているところです。以上です。

< 中島会長 >

ありがとうございました。春野会員から手が挙がっておられるようですのでお願いいたします。

< 春野会員 >

時間がないようなのでちょっとだけ、私たちの取組の中で今、感じてることだけお話ししたいんですが、3月ぐらいから埼玉県との相談がすごく増えてるんですね。私達の守備範囲としては、青少年と青少年の親御さんからの相談なんですけれども、ご本人からの相談も割と多くて、ご本人からの相談の多くは匿名になってしまって名前など言ってくださらないんですけれども、やっぱり性被害に遭ったとか、これは男の子も女の子もあったり、割と深刻で、それこそ死にたいという言葉が漏れたりとか、死にたいと言わなくても何だか一日中涙が出てるとかで、病院行ったらとか言うんですけれども、そういうところになかなかつながらない、つながる力がないというか、勇気がないというか、条件がないというか、そういうふうな子供たちも結構いるんですね。この増加の背景はわからないんですけれども、とにかく増えてるなという感じです。ずっと続くのかどうかかわからないんですけれども。去年の数で言えば、同じ時期で倍くらいに増えているというのがあって、また親御さんからも「死にたいです」に近いような、子供が大変だという話があって、ずっと連携ということが言われてるんですけれども、私達のところにつながったという意味ではつながったんですね。なので本当によかったなというふうには思うんですが、今、さいたま市とかで色々な大きな取組があるんですけど、色々なところに住んでらっしゃって、そのところでなかなかつながりを日常的につくるというのが難しい状態を私たちとしてはどうにかできないかなってというのはあります。

先ほどお話にも出たような、例えば女の子だったらボンドプロジェクトですとか、地域のこども食堂みたいなところがあるからそこでボランティアとか、友達もいなくて孤独だったらそういうのもやれるよってということで、そういうところにつなげたりもしてるんですけれども、それでも本人がそこにじっくりしなかったというふうなことになる、なかなか難しいです。

そういうことをちょっとご報告したいのと、学校という話が今まで出てるんですけれども、うちの相談に来るような子は学校からリタイアした子が多くて、中学校時代は何とか、高校は通信制に行った、でもそこでもなかなか上手くできない。ある子なんかはサードプレイスかわからないですけど、歌舞伎町に行って、歌舞伎町で友達できると思ったらそこでも上手く友達ができないみたいな、そういう友達をつくるのが得意でないような方たちというのがいます。

そういう意味で、今言おうと思ったのは、通信制高校とかそういうところに行った子たちが、公的な教育委員会ではなく、何かつながれたらいいなといいますか、孤独・孤立や自殺についての意識を持った取組があるといいなと思いました。例えば、児相とかに関わったりしても、大きな問題がないとすぐに帰ってきてしまって、まだ家庭が受け入れてそこまで上手く子供とやれる状況にないところに帰ってくると同じようなことを繰り返したりするということがあるんですね。個人情報とか色々なことがあるので、私たちも上手くつながれない、情報共有できない、情報交換できないというふうな、そういうもどかしさがすごくあります。とりあえず以上です。

< 中島会長 >

問題化しないとつながれなかったりする部分はあるのかなと聞いていて感じました。ありがとうございます。

高橋会員いかがでしょうか。手が挙がってますので、お願いします。

< 高橋会員 >

手短かに確認をしていただきたいなと思うことがあります。まず、スマホから LINE で相談をするというような場を想

定したときに、貧困ゆえに自分で自由に使えるスマホがある状態なのかというデバイスの問題ですね。公共のところに行って Wi-Fi の電波をつかまえるということもしますけど、デバイスの問題をまず確認をしたいなということと、今、夏休みに入りまして、これから 2 学期に入る直前が一番自殺が多いということで、これはやっぱり危機感を持っていかないといけないだろうなということですね。

それから、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの人たちの雇用形態が会計年度任用だということで、1 人のリスクの高い生徒を見守り続けるというところで、年度末の 3 月の頭に、このままその高校で、中学校で継続して働けるかどうかかわからないという不安定な雇用状態にあるということも大きな問題があると思います。これは県を超えるのかな、国で考えなきゃいけないのかなということですね。

そんなことでいくつか気をつけて見ていかなきゃいけない別の切り口についてちょっとお知らせしたかったです。

< 中島会長 >

ありがとうございました。また大事な問題提起いただきました。

スマートフォンは今、ひとり親家庭ですとか、経済的に厳しい家庭でも通信用に持たせるということが一般的で、かなりの子供たちが持つようになってるんですね。ただ、おっしゃるように持てない方も一部いらっしゃると思います。こういうことについて情報をお持ちの方いらっしゃいますか。

一般的に、子供の相対的貧困の議論では、スマートフォンは意外と持ってるんですね。だから担任の先生は気づけないんですね。普通に持ってるので、この子が貧困とはなかなか思えないという、そういう中で見過ごされることが多いんですけども。

< 坂本会員 >

うちに来る子供たちを見てると、親御さんが携帯の機種を買い換えられるときに、古い機種を電話契約はないけれども、お金がかからない形で持たせてる家庭は多いと思います。

< 中島会長 >

ありがとうございます。ですので、LINE とかその辺りであればあんまり費用はかからないんですけど、電話をかけるとなると負担がかかるのでというのが敷居が高くなる原因かなと思います。

村田会員さん、音声つながったようですので、どうでしょうか。

< 村田会員 >

東先生が冒頭に教育の関係をおっしゃって、私は今すごく効果を上げている埼玉県の事例として、ヤングケアラープロジェクトのことをお話したいなと思って、職員の方でご存じの方はご存じかもしれません。ケアラー連盟が受託事業として、県内の小学校、中学校を先生と元ヤングケアラーの当事者の人がペアから事務局となって授業として回っています。それがすごく好評です。小学生の場合は寸劇を入れたり、グッズを使ったりして。中学生の場合も津々浦々行っていて、もう 4 年目ぐらいなので、今年で大体一巡するという状況です。すごく子供たちの反応がいいです。クラスの 1 人か 2 人にはヤングケアラーいるんですよというお話をして、その話聞いてどうですかと言ったら「悲しい。私のお友達にそういう人がいたら、私は何か手伝いたい」とか、そういう感想が子供たちから出て、すごく手応えを感じています。高校に関しては 1 回、何年か前に県の予算で行ったんですけど、今は自主的に高校が財源を用意して手を挙げれば、そのプロジェクトチームが行ってお話するという事です。

東先生がおっしゃった自殺予防のプロジェクトも、先生がやるというのはなかなか難しいんじゃないかと思うんです。外部の先生がチームで来て見てくれるから、講堂とかで集まったり、Zoom なんかで全校生徒が一斉に聞いたりしてるんですね。やり方がすごく良くて、今、教育委員会も福祉と連携して、予算は教育委員会の方から出ていますけれども、すごく成功している事例だというふうに思っています。以上です。

< 中島会長 >

ありがとうございました。ヤングケアラーの取組は埼玉県トップランナーで、全国に先駆けて調査をやったり、取組を頑張っていたいただいて、まさにケアラー連盟と頑張っていたいただいてきてますね。東先生がおっしゃったことと繋がるところじゃないかと思います。ですから、こういったヤングケアラーの支援の一環として、自殺というテーマも合わせて取り上げていくという方が自然かもしれないですね。今、文科省もヤングケアラーがキーワードで入ってきましたので、一緒にやれるという気がして聞いておりました。

宮代町の小林会員さん、今のような展開はいかがでしょうか。ヤングケアラーですとか、そういう取組をしながら孤独・孤立の話をしていくということなんですけど。

< 小林会員 >

ヤングケアラーは本当にすばらしい取組を行っていると思います。うちの町の場合だと、調査してもプライベートな問題があってなかなか踏み込めなかったみたいな話も聞いていて、具体的なところまで行くのが非常に難しいのかなというふうに自分の中では思っていました。以上です。

< 中島会員 >

ありがとうございます。町になると顔の見える関係が非常に豊かにあるだけに、なかなか踏み込んだ内容になってくると難しいところあるかもしれないですね。深堀するということになって。

ただ、孤独・孤立というのは、そういう非常にデリケートな内容にはなってくるので、なかなか難しいところではあるんですけど、ただいまのようにヤングケアラーの視点ですとか、色々な取組の中で自殺のことも取り上げていくのもいいなと思って聞いておりました。

少し企業の皆さんにも聞いてみたいと思うんですけれども、なかなかダイレクトに自殺防止とかというと重たいと思うんですけれども、孤独・孤立でつながりにくいという中で、つながりサポーターの取組とかでいうと、例えば埼玉りそな銀行さんは認知症のサポーターとかも相当取り組んでおられますよね。いかがでしょうかこういったところから。

< 鈴木会員 >

認知症サポーターは昔から社員に研修を継続的にやっています。先ほど話題に出たヤングケアラーのセミナーは社内周知も含めて3年間ずっとやってまして、毎回バージョンアップして社外の方も参加できるような形で、元ヤングケアラーの方にお話をいただいたり、去年はアナウンサーの町亜聖さんと呼んで、弊社の社長もケアラーだったという話もしたりして、社員に広くヤングケアラーという存在を知ってもらうように、また業務時間中にも、例えば小さい子が1人で振り込みのATM操作をしてとか、普段ちょっと有り得ないような光景があったらすぐアンテナを張るようにみたいなそんな研修はやらせていただきました。

自殺っていうとすごく重い話で、会社がどのように関わっていけるのかなというのは答えがないところではあるんですけども、3、4年前からこどもの居場所を各所でできるところからつくっている中で、団体さんの活動を一緒に手

伝わさせていただく中で、ご利用団体に加盟してる子供さんへのインタビューとかをしてみると、「場所がなかったら夜も食べるものがなかった」とか、「多分、自暴自棄になって自殺してました」とかという言葉が結構、子供たちから出てくるんですよね。我々もその声を集めて社員にも展開したりして、こういう子が地元の埼玉県にもいるんだから、そういうところにも目を向けるようなことをしてくださいよと社内への醸成みたいところはやらしていただいております。

あとは、先ほどスクールカウンセラーの方のお話も出しましたが、本当にスクールカウンセラーの方がすごく大切な存在だとよく感じてるのは、スクールカウンセラーの方の情報のおかげで子供ともつながって、うちの施設を使ってもらっている子も結構います。もう我々の社員じゃほとんど想像もつかない、両親がいないみたいな小学生とかやっぱいるんですよね。そういう子たちは、うちの施設が唯一の通える場所で、夜 8 時までしか開いてないよと言ってるのに、「おじいちゃんが帰ってくる 10 時までいさせて」と言われるという話で、毎日のように接していてすごく根深い問題だなど。なのでスクールカウンセラーの方の待遇だとか、処遇だとか、雇用形態だとかというのもみんなで考えていべき話なのかなと思います。

< 中島会長 >

ありがとうございました。色々な取組をされてるのが見えてきたと思うんですけど、埼玉県社協の熊井さん、地域で実践していると企業さんが一緒にやってくると元気になりますよね。そういう連携した実践みたいなのところというのは、企業さんと一緒に地域の活動をしていくというような取組は非常に大事なかと。今のような気づきですとか、見える化が大事だと思うんですけど、いかがでしょうか。

< 熊井会員 >

そうですね。企業との連携という意味では、先ほどご発言いただいた埼玉りそな銀行の鈴木さんとは顔の見える関係であって、ざっくばらんに色々相談できる相手にもなっています。社協は、地域福祉を推進するうえで、住民同士の支え合いとか、福祉関係の NPO やボランティア団体の皆さんなどと、色々なつながりをつくっていますが、地域の福祉課題が複雑化、複合化しているこの時勢、これまでのつながりの枠では対応しきれないという感じはしています。

本日議論いただいている子供の問題や自殺の問題は、福祉の枠を超えている部分が多分にあって、そういう意味でも企業や多様な主体の皆さんといろいろ連携することは重要だと思っています。今企業の皆さんは、SDGs や社会貢献として地域に還元したいとか、とてもありがたいことに自分たちも何かできることがあればというスタンスをお持ちの企業が増えていると感じています。そうした企業と連携して、こどもの居場所づくりと一緒に考えていただくとか、すでに物資の支援をいただいているとか、間接的、直接的に子供の支援などに繋がっているという事例があります。また、地域のプラットフォームづくりに企業の協力をいただいているという状況です。

< 中島会長 >

ありがとうございます。今、企業さんと一緒にという色々なつながりの話がありました。

イオンの藤代さんですか、今日は代理でご出席いただいていると思いますが、私の大学はふじみ野市にあるんですけども、近くのイオンモールさんとは色々な連携をするようなお話が出たりとか、居場所づくりをとっていただいている印象があるんですけど、今のような取組のお話をずっと聞いていただいて、いかがでしょうか。

< 藤代代理 >

お話を聞かせていただいている、弊社としてできることが何かなというふうに考えてたんですけども。つながりサポーターの普及だったり、認知度を上げるためのポスターの掲示だったり、先ほど子供と接するために専門的なスキルを教育するというような話があったかと思うんですけども、これがもし開かれた形で児童センターの職員だけじゃなくて、広く子供に接する方に向けてだったら、そういったもののポスターの掲示だったりもご協力できるかなというふうに考えてました。

あとは、我々は総合スーパーでモールとも協力できますので、こどもの居場所づくり、例えば不登校の子供向けにボランティア学習のスペースを単発で設置してつくりたいということでしたら、ご協力とかできるかなというふうに考えてます。その他でも、何か開かれた場所でイベント等やりたいというのでしたら、ご協力させていただけるかなというふうに思ってます。

< 中島会長 >

ありがとうございました。様々な発表の場をモールでつくっていただいたりとか、色々なことをやっていただいている印象があって、社協とつながったりとか、広報だったりとか、知ってもらおうという意味でとても企業さんの存在は大きいなというふうに思っています。

今日は県の考えていただいた今年度の方針を見ながら、皆さんでどういうところが大事かということをお話いただいて、それで方向性を見定めていくということなんですけれども。いかがでしょうか。坂本会員から手が挙がりましたね。

< 坂本会員 >

自殺予防に関するポータルサイトの件で、特に動画の活用について質問いたします。

以前公開された YouTube 動画は、文字だけの広報よりも大変効果的で、素晴らしい内容だったと認識しております。

公開当初は広告展開をされていましたが、現在は YouTube 上で視聴できる状態に留まっているかと存じます。あの質の高い動画をそのまま埋もれさせてしまうのは、非常にもったいないと感じるのですが、今後の活用についてどのようにお考えでしょうか。

具体的には、自殺対策の強化月間などのタイミングで、再度広告費を投下して集中的に周知を図るといった、積極的な展開のお考えはございますか。お聞かせください。

< 中島会長 >

事務局からお願いできますか。

< 事務局 >

ご質問ありがとうございます。YouTube 動画に関しましてですけども、説明資料の中でも少し申し上げたところではございますが、今年度は昨年度作った広告動画を少し編集しまして、昨年度はつながる SAITAMA フェスタのご案内なども入っていましたので、そういうところを削除したりですとか、今年度バージョンに少し編集しまして、12 月のつながる SAITAMA 相談・交流 DAY に合わせて 1 か月前くらいから広告費を使って YouTube 等、配

信先についてはより効果的に配信できる媒体などを検討したいと思いますけれども、時間ですとか配信先を少し考えながら、また改めて広告配信したいと思っております。ただ、実際には編集と広告の費用しか取っていないので、小中高生の自殺対策とか、そういったところにスポットを当てた内容を盛り込む予算は今のところとってございません。坂本会員からおっしゃっていただいたように、効果的な広告だったんじゃないかと言っていただけだったので、いろいろな手法の一つとして動画広告というものを今年度もやりますし、できたら引き続きやっていけたらいいなというふうに思っております。以上です。

< 坂本会員 >

もし可能であれば、プラットフォームの会員の方たちにも自由に使ってもらえるような、期間限定でもいいと思いますが、一緒に広告してもらおう呼びかけなんかもあっていいのかなとちょっと思いましたので。子供のところがあればなおいいのかもしれませんが、その制作予算はないとのことですので、既存のものでも親御さんなんか見られるとよいと思いますので。

< 事務局 >

ありがとうございます。広告動画の活用場面というものを各会員の皆様にご協力いただけるようであればぜひお願いしたいなと思います。何かのイベントで流していただくですとか、何かのときにご紹介いただくですとか、もしくはホームページにリンク貼っていただくですとか、色々ご活用いただけるかなと思いますので、ぜひご相談、ご意見を頂戴しながら進めていけたらと思います。よろしくお願いいたします。

< 中島会長 >

土屋会員さんから手が挙がっていますけれどもいかがでしょうか。

< 土屋会員 >

ピッコラーレは埼玉県からにんしん SOS 埼玉を受託しております団体で、当然ながら妊娠をしてしまったことによって「死にたい」という相談は入ってきています。直接、自殺対策や孤独・孤立というところで、他のところと一緒に何ができるかという、おそらく色々な居場所の方たちで、もしかしたら妊娠のことで悩んでという方がいらしたときに、ぜひつなげていただいて、一緒にその妊娠を今後どうしていくかということを考えていけたらと思っています。

周産期という妊娠期から出産後 1 年ぐらいまでの間の死亡の中には、今までは出産での母体の出血や疾患とか、そういう医療的なものが多かったんですけども、最近では自殺というのが一番多くなってきているところも注目されています。それも以前は産後の鬱というようなところで、3、4 か月での自殺というところが脚光を浴びていましたが、妊娠期からを合わせてみると妊娠したということに気が付いたばかりの妊娠 2 か月の数が一番今は多いと言われている、それも調べただけがわかることであって、病院に行っていなかったり、解剖しなければお腹に赤ちゃんがいらして自殺しているかどうかというのはわからない状況というのものもあるのかなと思います。

ですので、やっぱり思いがけないタイミングでの妊娠、先ほど中高生などの性被害による相談というのものもありましたけれども、それが実は性被害だけではなく、妊娠していたということなどもあったりしますと、とても人には話せない、親に言うぐらいだったらもう死んでしまった方がいいという方などもいらっしゃると思います。先ほどヤングケアラーというような切り口もありましたけれども、妊婦という切り口においても、妊娠することで孤独・孤立ということがかなり強まってしまって、1 人で何とかしなくちゃいけないという思う方もたくさんいらっしゃるということで、妊娠関連のことで

あれば、どうぞにんしん SOS 埼玉の方に支援団体の方とか行政の方もどうぞ相談いただけたらありがたいなと思います。

やはり携帯の問題もとてもありまして、電話をしたくても電話が繋がらないという方は決して中高生だけではなく、大学生とか社会人の方においても、お金が支払えなくて、例えば、お産が始まっても電話が自分でできないので、漫喫から救急車を呼んで欲しいというような、そのような要請もあったりする状況です。固定電話も減っていますし、公衆電話も減っていたりするような状況もあるので、色々なところで困ってらっしゃる方いらっしゃるのかなと思いますので、私たちも色々な意味でアウトリーチしていきたいと思っておりますが、どうぞ連携させていただけたらと思って発言させていただきました。

< 中島会長 >

ありがとうございました。とても大事なご指摘をいただいたと思います。

本当におめでたいこと、周りから見るととても喜ばしいことのように見えるその陰に、色々な課題があるといいですか。自殺のところで、出世だったり、結婚だったり、出産だったり、周りからすると本当にとってもおめでたいことはずなのに、そこに実は原因があったりするという難しさを改めて感じますけれども。ありがとうございました。

最後の資料見ていただきますと、今日、意見をいただきたいということで、事務局の方で整理していただいたものがあります。意見交換の開催を考えた時に、今回はかなり自殺が大きなテーマになってきたかなと思うんですけども。もう一つは、つながり方とか相談の仕方とか、そういうこととセットの方がいいのかなとも思いました。記録を起こす中で事務局の方でも整理をしていただけたらと思います。

メタバースのところはあまり意見がありませんでしたけれども、つながる SAITAMA フェスタはまた繋がっていきますし、電話はなかなか敷居が高いという話もありました。なかなか相談ということだけでも難しいし、居場所だけでも難しいという議論もあったんですけども、そういう中でどんな形がいいのかというのも、まだ少しお時間ありますのでご意見いただければと思います。

つながる SAITAMA 大賞は、ぜひ引き続き好事例をとしたいと思いますし、つながりサポーターの養成講座については大分ご意見いただきましたので、ぜひ自治体、企業、大学等との連携でというふうに思います。

いかがでしょうか、武蔵野銀行の谷口さん、全体を聞いていて。広報のこととか色々出てきましたが、何かお気づきの点ありましたら、いかがでしょうか。

< 谷口会員 >

前は、どういう年齢層だとかのお話だったかと思いますが、やはり今回の皆様の意見や最初の話聞いて、小中高生の自殺というのが過去最多で、令和 6 年で 529 人というのは本当に改めて由々しき問題だな、ひょっとしたら日本が一番多いのかななんて思いました。原因はいろいろあるかとは思うんですけども、なかなか対応方法も難しい中で、熊井さんや埼玉りそな銀行さんの鈴木さんのお話なども聞きながら、大人を考えてもそうなんですけども、子供自身の声を聞く、埼玉県も「さいたまけん★こどものこえ」ということで色々な声を聞こうという取組をされてるかと思いますので、お子さん自身の声を聞く場というのがもっともっと必要なかなと思いました。

私どもの方も夏休みに入って、こども食堂などに協力していただけるような事業者様と一緒に、子供服の譲渡会ですとか、お菓子の製造メーカー様と合わせてこども食堂の企画などもしてるんですけども、本当にあっという間に 1 時間ぐらいで 200 食がなくなってしまうだとか、年々そういう場を必要としてる方が多いのかなというのを肌身で感じております。

あと、ちょうど一昨日なんですけども、ある企業団体の勉強の場で、さいたまユースサポートネットの青砥専務のお話を聞く機会がありまして、何か協力したい、何かできることはないかというようなことを考えている地域の事業者様もすごく多いので、そういう方ともうまくネットワークをつくりながら、子供の問題ですとか、孤独・孤立対策のネットワークがもっともとうまくできたらいいのかなと思いました。

< 中島会長 >

ありがとうございました。今後の意見交換会では、東先生のコーディネートでさいたまユースサポートネットの青砥さんと埼埼玉りそな銀行の鈴木さんとかが一緒になって、子供たちや孤独・孤立のことなどを話すと楽しく重要な議論ができそうかなんて思いながら聞いてましたので、またぜひ、そういう知恵をいただければと。すごく参考になるお話をありがとうございました。

いかがでしょうか。全体の方針、色々出てきておりますが。ヤングケアラーのお話を村田さんからしていただきまして、地域の子供の子育て支援については坂本さんからご指摘いただきました。

村田さんから手が挙がってますね。どうぞお話しください。

< 村田会員 >

私、草加の「さかえーる」というところにヒアリングに行ってきたところなんですけども、1つの大きめお家を5つの草の根のボランティア団体が利用して、主に高齢者のための居場所づくりをやってるんですね。すばらしい活動で、6人の方が送迎なんかも手伝って、印象的だったのは、受益者と呼ばれてる層は80代、ボランティアで支える層が70代で、混然一体となっているんです。そういう中で、孤立死を防ぐということも、この場所ではできていて、お電話を毎週1回だけだけれども掛けるなど色々な活動されてたんですけど、これで地域は変わりましたかと私が質問したら、「よくわかりません」という方と「いや、まず人が変わった」と言う方がいたんですね。5団体集めるとボランティアさんたちが50人ぐらいらしいんですけど、その人たちがすごく生き生きしてきたと。地域が変わるとはどういうことかなあと思ったんですけど、やっぱり人間が変わるということかと。目には見えないんですけども、来てらっしゃる方全員がすごく楽しそうなんです。それも、そういう拠点があったからで、メタバースももちろんいいんですけど、すぐ助けてくれる人というのがメタバースの中では見つけられないけど、地域の居場所だと、電話が掛からないから行ってみようかと言ってくれる人がいたりして、「腐らない前に見つけてね」というのが合言葉らしいですよ。

なので、私はりそなさんの YOUTH BASE が2つになったのをすごく評価していて、そこも複数の団体が使っていて、そういうちょっとした団体は居場所を獲得するのがすごく難しいので、こういう仕組みがもっと増えていったらいいなというふうに今感じております。

< 中島会長 >

ありがとうございました。まさに今のような話で、色々な可能性があって、企業がこんなふうに場所を提供してますよ、小さい団体が企業に貸していただいた場所を使って活動してますよと、色々な人が知っていくと、色々な新しい動きができる可能性が広がってきますよね。とてもいいなと思って聞いていました。

今年度の意見交換の最初のテーマは、資料2にもありますように、どうしても孤立死とか高齢者の孤独の問題も大きいので、単身の高齢者をテーマにどうかと、昨年度からの流れの中で取り上げてるんですけど、今日たくさん議論になったのは子供たちの孤独・孤立の問題、それに伴う若者たちというような話もあったので、これはまた次のテーマになっていくのかなと思って聞いてました。ここにヤングケアラーも入ってくるんじゃないかと思います。

全体の議論として皆さんからご意見いただきましてありがとうございました。事務局の方で今日の議論を上手にまとめていただいて、多分整理をしていただけたと思うんですけども。青砥さんはいかがですか。だいたひ話題が出ていましたけれど、最後に一言いかがでしょうか。

< 青砥会員 >

今日は孤独・孤立というところで色々な方々となつなかりをつくる、地域でどういうふうになつなかりていくかということで、我々も先ほどご紹介させていただいたような実践をしているところなんですけれども、他の地域の皆様、埼玉県内でいくつもそういった活動されてる方々がいらっしゃるのて、皆様の実践を共有させていただき、教えていただいて、私たちの活動の参考になさせていただきますような機会をいただけたら、勉強させていただけたらと思っております。そのような交流の機会をぜひお願いしたいと思つてます。よろしくお願ひいたします。

< 中島会長 >

ありがとうございました。よろしければ県の茂木課長もいかがでしょうか。皆さんの意見を聞いてのご感想でも結構ですけれども。

< 福祉政策課長 >

福祉政策課長の茂木です。

今日は皆さんがそれぞれの立場から、実際に現場で対応してる様子なども含めて、私どもは企画する部署ということで、なかなか生の声を聞く機会が取れないので、非常に勉強させていただきました。私は県の職員になつて福祉の部署に一番長くいるわけなんですけれども、この孤独・孤立と問題で横串を刺して、福祉だけではなく教育、保健医療、その他の部署も含めて、色々な部署でそれぞれの対応しているところがすべて孤独・孤立に繋がっているということも今日の皆さんのお話を聞いて深く感じたところでございます。

今年度の事業はこれから企画していくものもありますので、今日のご意見を参考にさせていただいて、より実効性のある企画を実現していけたらと考えております。本日は皆さん貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。

< 中島会長 >

ありがとうございました。

今日は令和 7 年度の計画ということで、こういう方向性でということで、全員からご意見いただきました。これを参考に、事務局の方でさらにまとめていただけるものと思ひます。

それでは、本日の議事はこれで終了させていただいて、事務局にお戻しをしたいと思ひます。